

「越天楽今様」新たな視点によるアプローチ ～小学校6年生における授業の構成～

伊 野 義 博

はじめに

本稿は、小学校第6学年において歌唱共通教材として指定されている「越天楽今様」を教材に授業化を試みたものである。現在「越天楽今様」は、平調越天楽の旋律に慈鎮和尚作歌とされる歌詞が付され、一つの「歌」として提示されているが、その歴史的な位置付け、雅楽との関係など不明確な部分も多い。また、児童の興味関心、どのように歌ったら良いかといった発声上の課題も指摘されている。

本稿では、「越天楽今様」の学校教育における歴史的な過程、今様の現代的な意義について検討し、音楽教育上の位置づけを明らかにした上で「越天楽今様」を教材とした「歌の誕生劇をくなくぞる」新しい授業」を、授業実践する過程を詳細に記述することを通して提案する。実際、提案されている授業は、平成14年5月、新潟大学教育人間科学部附属長岡小学校において筆者により実践された。本稿は、その際参会者に資料として配付したものをもとにしている。

こうした性格上、本文はいわゆる「ですます調」で語りかけるように書かれている。また、現在の学校教育における課題である評価についても配慮をした。授業構成の手順と内容は、およそ以下の通りである。

- 1 「越天楽今様」教材としての困惑
- 2 学校教育における「越天楽今様」
 - 1) 教材曲としての歴史
 - 2) 教科書の「越天楽今様」
 - 3) 授業実践における「越天楽今様」
 - 4) 「越天楽今様」演奏上の問題
- 3 「越天楽今様」とは
- 4 「今様」とは
- 5 活動と教材の予想
 - 1) 「ことば」は「うた」をもっている
 - 2) 「うた」は「ことば」をまっている
 - 3) 自分のつくったうたを歌い友だちと交流する
- 6 他教科における既習内容との関連
- 7 宮沢賢治の「雪わたり」における「うた」の誕生
- 8 授業の発想
- 9 授業の枠組み
- 10 授業構成案
 - 1) どのようなテーマか

- 2) なぜこのようなテーマか
- 3) テーマのねらいは何か
- 4) どのような流れになるか、用いる教材は何か
- 5) 学習指導要領との関連はどうか
- 6) 評価規準をどのように設定するか
- 7) 授業の全体計画、そして評価の計画と方法は？
- 8) 実際の展開はどのように予想しているか？
- 9) 評価の進め方は？

◎ 資料

- ・学習プリント1
- ・学習プリント2
- ・学習プリント3

1 「越天楽今様」教材としての困惑

今回授業をするにあたっていろいろ考えましたが、結果的には自分が以前から不思議に思っている教材、悩んでいる教材、そしてとても扱いにくいと感じている教材に挑戦し、題材化することにしました。それが「越天楽今様」です。

越天楽今様に対して「不思議」とか「悩んでいる」とか「扱いにくい」という感覚をもっていたのは、主として次のような理由からです。

- ・子どもの興味、関心（児童が興味を持って学習するだろうか）
- ・発声上の課題（どのような声、どのような高さで歌ったらいいのだろうか）
- ・教材の正体（そもそも越天楽今様とは、なにものぞ？ そして今様とは？ どのように歌えばいいのか？ テンポは、歌詞は、楽器は？）
- ・教材を扱う上での困惑（越天楽か今様か、はたまた越天楽今様か。歌唱教材なのか器楽教材なのか、あるいは鑑賞教材なのか。）

どれもこれも私には難しい問題で、一歩後ずさりしてしまうのです。リコーダーで旋律を演奏したり、笙の和音の一部を模して鍵盤ハーモニカで響きを作ったり、あるいは、あのゆっくりとしたテンポで「春のやよい〜」を歌唱するといった学習では満足できない自分がありました。雅楽に結びつけて学習することも意義のあることだと思いますが、どうしても「今様」という言葉にひっかかるのです。この曲を学習することの本質的な意味をおさえた、別のアプローチのしかたがないだろうか。こんなことを漠然と考えていたわけです。

それで思いついた題材が、「私の越天楽今様」です。「私の」と付け加えたのは、今様について、それを「うた」にした当時の人々が、自身の感慨を言葉にし、それを自分の声で、例えば雅楽の旋律のようによく知っている節にのせて歌い上げたのではないかな、と漠然と思っていたからです。自分の感慨を自由に歌いあげることが、何か核になりそうだな、と直感的に感じて「私の」「越天楽今様」という題材にしたわけです。いずれにしても、授業公開のことを考えれば非常に「あぶない」動機であるわけです。

しかし授業の構想においては、えてしてこういった日常的な疑問や困惑、そして授業者や研究者としての直感が重要な意味を持つことも少なくないと思っていて、あえて記述した次第です。そして案の定、こうした疑問や直感は音楽科教育における課題につながり大きくふくらんでいきました。しかしながら同時に私を混迷のトンネルへと導いていったのです。

ともあれ、本稿はこうしたいわばあいまいで不透明な問題意識がどのような過程を経て授業に結びついていくのか、その詳細を記述したものです。

2 学校教育における「越天楽今様」

まず、この教材が学校における音楽授業においてどのように扱われているか調べてみましょう。

1) 教材曲としての歴史

本年度より全面実施となる学習指導要領では、小学校音楽科において6年生の歌唱共通教材として越天楽今様が指定されています。正確には、

「越天楽今様（歌詞は第2節まで）」（日本古謡）^{えてんらくいまよう} 慈鎮和尚^{じちん}作歌

となっています。

この曲は、平成元年改訂の学習指導要領でも同様の形で指定されています。しかしその前、あるいはさらに前、すなわち昭和52年、昭和43年の改訂では見あたりません。ところが、昭和33年の改訂では、

「今様（日本古謡）」

が中学校1年生の鑑賞共通教材に指定されています。「今様」は昭和44年から平成元年まで、およそ20年間共通教材ではなかったわけです。

ちなみに当時の中学校1年生の教科書¹の例を見てみますと、「今様…日本古謡 チェロ独奏」といった形で鑑賞教材として掲載されています。「チェロ独奏」というのもおもしろいのですが、興味のあるのは今様とされた旋律が、山田耕筰によって編曲されたものであり、現在指定されている「越天楽今様」とはまったく異なった陰音階の旋律であることです。教科書には、次のような説明文があります。（下線筆者）

ここでとりあげた「今様」は、いく種類かのうちの一曲で、山田耕筰によって編曲されたものです。雅楽の旋律をとったものには「越天楽今様」のように有名なものもあります。

当時は今様を「いく種類かのうちの一曲」ととらえていたこと、すなわち教材としての「今様」を必ずしも「越天楽今様」と限定していなかったこと、同じ今様でも「古謡」としての「今様」から現行の「越天楽今様」へと教材の指定が変化していることがわかります。

さて、ご存知のように共通教材の指定は昭和33年の改訂からですので、学習指導要領に定められた共通教材としての「今様」はこれ以上さかのぼることはできません。しかし昔の教科書をもう少し見てみましょう。手元にある昭和28年発行（昭和29年度用）「教藝の中学音楽3」²の中学校3年生の教科書では、「越天楽（日本古謡）」として、現行の越天楽今様の旋律が、混声4部合唱に編曲されて載っています。ここでは「独唱または混声4部合唱」といった指定があり、いわゆるハーモニーが付けられています。この歌には「越天楽今様」ではなく「越天楽」の名が付けられています。混声合唱として扱われているのも興味がありますね。さらに時代をさかのぼって、明治時代をのぞいてみましょう。明治14年に音楽取調掛により刊行された小学唱歌集初編の第15曲に次の歌が掲載されています。

第十五 春のやよい

- 一 春のやよいの、あけぼのに、
- 四方のやまべを、みわたせば、
- はなざかりかも、しらくもの、
- かからぬみねこそ、なかりけれ、

このあとに、「はなたちばなも～」「秋のはじめに～」「冬の夜さむの～」と4番まで続きます。この歌詞は、いわゆる現在の教科書で慈鎮和尚の作とされるものです。しかしながらその旋律は「ミーミレミソソ

「ミミレドー」すなわち

「ミーミレ | ミソソソ | ミミミレ | ドー〇〇 |

「はー一の | やよいの | あげぼの | にー〇〇 | (〇印休符)

となっており、いわゆるヨナ抜き音階(ドレミファソラシドの4番目のファと7番目のシが抜けている音階)でできています。越天楽の旋律とはまったく異なったものであります。

以上のことからいくつか判明したことがあります。すなわち、

- ・現行の共通教材としての「越天楽今様(慈鎮和尚作歌)」は、平成元年からである。
- ・昭和33年の改訂では、「今様(日本古謡)」となっており、教科書には現在知られている平調越天楽の旋律以外のものも掲載されていた。
- ・過去に同様の曲を「越天楽」として掲載していた教科書もあり、また混声合唱としても扱っていた。
- ・明治期の唱歌集初編には「春のやよい」と題して、現在慈鎮和尚作歌とされているものに別の旋律がつけられている。

この事実を目の前にして、また考えてしまいます。

私たちは「越天楽」と「今様」をいつのまにか不可分のものとして扱っているのではないのでしょうか。現代では一般的に詩と旋律が一体化してはじめて「歌曲」と見なしていますが、それと同様に、慈鎮和尚のうたと越天楽のふしを一体であると考えてはいないのでしょうか。

越天楽とその歌謡の関係については、平野健次先生監修のLPレコードにたくさんの曲が示されています³。そこをみても越天楽の節につけられた詞章は様々で、

梅が枝にこそ 鶯は巢をくえ

風吹かば いかにせん 花に宿る鶯

といったものが古い時代の代表例です。この他に明治期に保育唱歌として、越天楽の旋律に「かざぎのやまを いでしより さしてゆくえは さだめなき〜」などといった歌詞も付けられています。賛美歌としても歌われているのです⁴。そしてその賛美歌の歌詞は、「花のあげぼの月の夕〜」となっています。

さらに「春のやよい〜」の歌詞が、別の旋律につけられている例もあります。前出の小学唱歌集初編の第15曲や山田耕柞編曲とされたものがその例です。「ふし」と「詞」はもう少し分けて考えた方が自然なようです。

2) 教科書の「越天楽今様」

教科書では、「越天楽今様」はどのように解説され、どのような学習が期待されていたのでしょうか。2つの例を見てみましょう。

「小学生の音楽6」(教育芸術社 平成4年発行)の指導書(pp.100-111)及び「新編小学生の音楽6」(音楽之友社 平成4~7年度用)の指導書(104-117)をよりどころとします。前者をA、後者をBとしておきましょう。

Aでは「日本のふし」とした学習主題のもとで、「越天楽今様」は「こきりこぶし」「春の海」とともに、「伝統音楽の旋律や響きの特徴を感じ取ったり、曲想を生かして表現したりする能力を育てる」ことをねらいとしています(p.108)。Bでは「日本の音楽」という主題のもとで、「越天楽今様」は「春の海」「みんなのおはやし(創作)」「雅楽越天楽(参考曲)」といった教材とともに、「日本の楽器である箏と尺八の2重奏の響きを味わい、情景を想像しながら聴かせる。」「日本のふしに親しみ、旋律の素朴さを感じ取るとともに、表現の工夫をさせる。」といったねらいが示されています。以下「越天楽今様」について、対比表を作成してみました。

項目／指導書	A	B
主題	日本のふし	日本の音楽
ねらい	伝統音楽の旋律や響きの特徴を感じ取ったり、曲想を生かして表現したりする能力を育てる。	日本のふしに親しみ、旋律の素朴さを感じ取るとともに、表現の工夫をさせる。
教科書における児童への呼びかけ文	<ul style="list-style-type: none"> ・ふしの感じや音のひびきを味わいましょう。 ・(和音の部分)の音色を工夫しましょう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・日本のふしの感じを味わい、景色を思いうかべながら歌いましょう。 ・雅楽「越天楽」のふしと、きき比べてみましょう。
指導の流れ	<ul style="list-style-type: none"> ○曲の感じをつかませる。 ・範唱を聴き、日本の伝統的な旋律であることを知る。 ○範唱に合わせて歌わせる。 ・歌詞を読み、善愛の意味を理解する。 ○旋律の特徴を感じ取らせる。 ・使われている音を調べ、長調や短調と異なることを知る。 ○楽器のパートを演奏させる。 ・リズム伴奏を加えて合奏させる。 ○歌と楽器のパートを会わせて演奏させる。 ・音の響き合いを感じ取りながら演奏する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○「越天楽今様」の曲趣の感得 ・階名唱や歌詞唱したり、リコーダーで奏したりして、ふしの感じをとらえる。 ・曲の感じを話し合い、伝統音楽について知る。 ○歌詞の大意を理解する。 ・意味のわかりにくい語句を調べる。 ・春の句と夏の句の大意を理解する。 ○「越天楽今様」の歌唱・言葉の発音に気をつけて歌詞唱する。 ・曲の感じを生かし、レガートな歌い方を工夫して歌う。 ○雅楽「越天楽」を聴く。 ・「越天楽今様」は、雅楽「越天楽」のふしに歌詞がつけられてものであることを知る。 ・雅楽「越天楽」の演奏に合わせて、「越天楽今様」の歌を口ずさむ。 ○「越天楽今様」のふしを演奏する。 ・テンポに注意し、レガートに演奏する。 ○「越天楽今様」の合奏をする。 ・ふしにリズム伴奏をつけて奏する。 ・オスティナート奏を加えて合奏する。 ・歌に合わせて合奏し、日本のふしに親しむ。
曲について	<ul style="list-style-type: none"> ・この今様は雅楽「越天楽」の旋律に歌詞をつけたもので、歌詞の作者慈鎮は、比叡山延暦寺の高僧で、平安末期から鎌倉時代のころの人である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・平安中期頃から雅楽曲の唱歌のふしに国語の歌詞をつけて歌うことが流行し、ことに「越天楽」のふしにつけたものが俗間にもはやされた。この「越天楽今様」は江戸時代のものといわれている。
掲載曲の音楽的特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・五線譜で記載 ・4分の4拍子 ・開始音g（一点ト音） ・速度：4分音符76～80 ・トライアングルと大だいこによるリズム伴奏型 	<ul style="list-style-type: none"> ・五線譜で記載 ・4分の4拍子 ・開始音g（一点ト音） ・速度：4分音符66～72 ・トライアングルと大だいこによるリズム伴奏型

	<ul style="list-style-type: none"> ・器楽合奏としても編曲（リコーダーあるいは鉄琴、笙の雰囲気演奏させるオルガン、アコーディオン、鍵盤ハーモニカ） ・歌詞：教科書には2番まで掲載、指導書には第4節まで掲載。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教科書には歌唱曲として表示、ただし、指導書には器楽合奏用楽譜を提示（歌・リコーダー、オルガン・アコーディオン・鍵盤ハーモニカなど、鉄琴・木琴による3重奏曲） ・歌詞：教科書には2番まで掲載、指導書には第4節まで掲載。
--	--	--

このように表を作成してみますと、「越天楽今様」に対する学習の意図が見えてきます。

まず学習のねらいですが、それぞれ「伝統音楽の旋律や響きの特徴を感じ取ったり、曲想を生かして表現したりする能力を育てる。」「日本のふしに親しみ、旋律の素材さを感じ取るとともに、表現の工夫をさせる。」とあり、日本の伝統的な音楽の響きや旋律の特徴を感じ、表現することに焦点化されています。そしてそのために、児童に「ふしの感じを味わったり、情景を想像」させながら表現させようとしています。また、器楽合奏や雅楽と関連させ、雅楽越天楽の演奏を意識して音を重ねたり、雅楽越天楽と聴き比べをしたりすることを呼びかけています。具体的には、歌詞の意味、旋律の日本的特徴を押さえ、歌唱による表現をしたり、器楽合奏を行ったりする活動です。

楽曲は、共通して、五線譜で示され、4拍子の曲として扱われて、ゆったりとした速度で演奏するよう指示されています。開始音はソ（g:一点ト音）となっており、リズム伴奏の例も示されています。なお、リコーダー、鍵盤ハーモニカ、トライアングル、大太鼓など西洋楽器による合奏が特徴的です。

さて、こうしてみたときにまたまたわからなくなってしまいます。

いったい日本の伝統とか、日本のふし、日本の響きを感じるとはどういうことなのでしょう。音階の特徴（日本的音階であること）とか、情景を感じるとか、ということは一つの窓口になるでしょう。しかし4拍子としての扱い、ソ（g）の開始音、鍵盤ハーモニカやリコーダーでの演奏が、どこまで「日本」とつながっていくのでしょうか。そもそもここでどのような響きを体験させたらよいのでしょうか。雅楽ですか？ いえいえ、この教材は「越天楽今様」ですよ。ますますわからなくなってくるのです。また、Bにおいては「越天楽今様」は江戸時代のものといわれている、という解説がありますが、これが正しいとすれば、「平安時代」といった固定的なイメージは考え直さなければなりません。

3) 授業実践における「越天楽今様」

「越天楽今様」実際の授業ではどのように扱われているのでしょうか。教え子の小林慶子さん⁵が、『越天楽今様の教材性』と題した卒業論文（平成13年度卒業論文）をまとめる際に、たくさんの事例を調査しました。具体的には、雑誌『教育音楽 小学校版』（音楽之友社）、『音楽鑑賞教育』（音楽鑑賞教育振興会）の事例をあたったのですが、例えば、『音楽鑑賞教育』誌において過去10年間（1992. 1～2001. 12）に授業実践例が250本程紹介されていますがこのうち、「越天楽今様」を扱ったのはわずか3本のみであったということです。この数はどのように考えたらよいのでしょうか。やはり「やりにくい」教材なのでしょう。貴重な3つの事例を見てみましょう。

一つ目の事例（1994年1月号、pp. 55-56）には、興味深いことが書かれています。最初のクラスでは、「越天楽今様」を「歌唱教材としての扱いを中心」としたら、児童の口が重く動かなくなり、ついには「先生、もう二度とこの曲しないで！」という言葉となったという報告です。このため、指導計画を練り直し、授業の流れを「合奏→歌」と変更し、まず「越天楽今様」のリコーダーでの演奏→トライアングル・大だいこによるリズム奏→歌詞をつけて歌う、といった手順をくみ、最終的にピアノ伴奏による歌唱へと導いたら成功したということです。

この事例は先生のような工夫を学ぶことができますが、私には「越天楽今様」が「歌うこと」の喜びとして直接つながっていかなかった事実、この点がとても印象的でした。

第二の事例（1999年9月号、pp. 36-42）においては、「越天楽今様」は、器楽曲として扱われています。ここでは、「箏を中心としたアンサンブル」が実践され、「雅楽に基づく『越天楽今様』に箏を中心としたアンサンブルで取り組み、雅楽の雰囲気を感じ取りながら、アンサンブルの楽しさや喜び」を味わわせることをねらいとしています。具体的には、箏、三味線、リコーダー、鍵盤ハーモニカ、締め太鼓、平太鼓、当たり鉦、指揮者といった編成による「越天楽今様」のアンサンブルです。実践では、児童の意欲的な感想が述べられています。

やはり、「越天楽今様」はこうした器楽合奏曲として扱う方がよいのでしょうか。またこの実践では「越天楽今様」という「曲」が「独立」したものと扱われ、その旋律が編曲されていることも印象的です。つまり、「越天楽」のふしによる「今様」ではなくて、「越天楽今様」なのですね。「今様」が消えかかっている。

第三の事例（1999年9月号、pp. 44-51及び10月号、pp. 38-45に連載）は、「総合的な学習を意識した鑑賞指導の試み 雅の世界をプロデュース」と題した、意欲的な取り組みです。総合的な学習の設定された小単元「雅な世界をプロデュース」の中で、「越天楽今様」は、雅楽「越天楽」と深く関連づけて扱われています。

児童は、「雅な文化」の学習として雅楽を調べ、その越天楽を鑑賞することになります。「雅楽へのあこがれの気持ちが高まった」ところで「越天楽今様」が提示され、児童は自分たちなりの「越天楽今様」の合奏に挑戦していきます。使用される楽器は、リコーダー、鍵盤ハーモニカ、ピッコロ、箏などです。これらの学習の後、実際に雅楽越天楽の演奏家に演奏を評価していただいたり、雅楽越天楽の演奏を聴いたり、最終的には、「和楽器だけで『越天楽今様』の演奏にチャレンジ」しています。地域の演奏家を招聘し、生きた体験をさせる素晴らしい実践だと思います。

ただ、私が疑問に思うのは、こうした学習の流れの中で、「雅楽越天楽」と「越天楽今様」が混在してしまい、自分の言葉で、自分の声で思いを歌い上げる「今様」の姿がいつのまにか消えてしまっている事実です。この実践においては、雅楽越天楽と越天楽今様がほとんど同義になっており、歌唱教材としての「越天楽今様」がどこかへ行ってしまっている。私たちは「越天楽今様」に対して、いつのまにか何か不自然な「置き換え」をしているのではないのでしょうか。

4) 「越天楽今様」演奏上の問題

さて、「越天楽今様」に関しては、まだまだ思うことがあります。それは演奏上の問題とでも言ったらよいのでしょうか。これまでの問題を整理しながら考えてみましょう。

まず、確認しておきたいことですが、「越天楽今様」は、「歌う」ということが重視された教材だということです。学習指導要領でも歌唱教材として指定されているし、歴史的にみてもそうであった。このことは、重要であると思うのです。これまで見てきたように、実践場面において「越天楽今様」は器楽的な扱いをされることが多いようです。これは前述したように平成元年度の学習指導要領において、以前は「今様」であったものが「越天楽今様」という「曲」になったこととも関連してくるかもしれません。中学校における雅楽越天楽の学習とも関連づけられるでしょう。しかし、ともかく「今様」であるかぎり「歌われる歌」であることは明確ですし、その意味を大切にしたいと私は考えるのです。

ところが、先の実践報告にもあったように、この「歌う」ということが難しいようで、現に前述したBの指導書（p. 111）では次のような文章さえ掲載されています。

「越天楽今様」の器楽合奏について

本来、この「越天楽今様」は歌謡のためのものであるが、現代のこどもたちが歌唱教材とするには、あまりにもなじまない。そこで、ふしを中心に、オスティナートとリズム伴奏による合奏の形を例示してみた。（中略）日本のふしに親しませるための便法として合奏するのも1つの方法である。

「歌う」ことが困難な背景には、テンポ、音高、声の質と歌唱法、歌詞の内容等々様々な問題が含まれているようです。このうち、音高や声質の問題について、岩崎洋一先生が詳述されています。

先生は著書において「日本の伝統音楽を表現する声」として項を起こし、「邦楽の発声法」「今様の歌い方を探る」「越天楽今様』を歌うための試み」「声を使い分けて見よう」といった形で、今様の発声について研究・実践され、次のような提案をされています。

どうぞ、頭声だけではなく音域を下げて響きのある地声で「越天楽今様」を歌ってみてください。(中略)これまで知らなかったその曲の違った味わいが体験できるはずです。

本来「今様」がもっていたであろう声の出し方に注目する。こうした実践をするだけでも、音楽は大きく変化することでしょう。しかし、私にとってさらに意味のあることは、この提案の基にある発想です。ここにあるのは「今様」をはじめ、種々の日本の「うた」はどのように歌われてきたのだろうか、そのことを考えた授業をしよう、という提案です。「今様」を歌うということはどういうことか、といった視点で考えるということが重要だと思います。

テンポの問題については、秦恒平氏の興味ある記述があります。氏は、今様の復元演奏を聞いた感想を次のように述べています。

どうしてもあれは今様以前の宮中雅楽や野曲や古い声明音楽により引かれて復元されたかという印象を禁じえなかったのです。こう悠長では、中世の幕あけに臨んだ人々の今様感覚とは思いつらかったのですね。後白河院があんなに熱心に探求した新音楽、新歌唱法つまり今様は、もっと、私どもの今読んでいる歌詞にも即して、テンポの速められたものではなかったかと期待したのです。が、分かりません。残念ながらどうだかよく分からないのです⁷。

こうしたことは、今後専門的な研究の進展を待たなければならないことで安易なことは申せません。しかし当時の人々の感覚的な問題を考慮した時、私ももっと速いテンポが適当ではないかと思います。少なくとも、現在の雅楽「越天楽」よりははずっと速く歌ってよいのではないのでしょうか。というより、梁塵秘抄で見てきたように、歌われる状況や歌詞、階層が実に様々ですから、教科書のようにテンポをあまりに固定するのは不自然に思えるのですがいかがなものなのでしょうか。音高の問題も、節回しや音階構成ももっと自由度が高かったと思います。そうでなければ、越天楽の節から黒田節が生まれようもありません。(あくまでも推測です。)

3 「越天楽今様」とは

ついに、面倒な部分にきてしまいました。でもさけては通れない問題です。最初にお断り(弁解)しておきますが、このことについては私にはわからない部分が多く、もっと時間をかけて専門的な研究結果から学ぶ必要性を痛感しています。いずれ、挑戦したいと思っています。

「越天楽今様」あるいは「越天楽」に関する代表的な研究として、先に紹介した平野健次先生の解説があります⁸。そこにはいくつかの重要な内容が書かれていました。いくつか例示します。(下線筆者)

中国大陸から伝来した雅楽というものを考える時には、この越天楽くらい雅楽らしくない曲もないのではないでしょうか。

平野先生によると、越天楽は日本で作曲された可能性が大きいということです。越天楽は大陸から伝わったといった話を聞きますが、「雅楽が大陸から伝来した。→越天楽は雅楽の代表曲である。→越天楽はその名残を示している。」というような短絡的な構図はここでくずれてきます。

越天楽の3種の中で、その「平調」のものが、原曲であるかどうかには、問題があります。

越天楽には、よく知られている「平調」のもの他に「盤渉調（ばんしきちょう）」「黄鐘調（おうしきちょう）」といった調子がありますが、平調の曲は、「盤渉調から移曲」された可能性が大きいということです。つまり、平調越天楽は、本家本元ではない可能性が高いということになります。

『源氏物語』などに書かれている「今様」が、ただちに、この越天楽今様であるかどうかには、大きな問題があります。

現行の越天楽今様が、平安時代からあったように思うのにも問題があるということです。この点について、蒲生美津子先生は、「十七世紀前半までの越天楽は、雅楽譜を見る限りではすべて今日親しまれている平調の越天楽ではなく、盤渉調という調子に基づいた越天楽なのである！！⁹」という指摘をされています。現在の平調越天楽はかなり新しい時代に作られた可能性があるということです。

「唱歌」は、単に擬音的な音声ですから、言葉としての意味は持っていませんが、そうした定められた「唱歌」の代りに、何か文芸的な意味のある詞章を当てはめるということも、当然考えられたことと思います。

ここで言う「唱歌（しょうが）」は、文部省唱歌の唱歌（しょうか）ではなく、楽器を覚えるために口で唱えた節のことです。雅楽の筆筈の唱歌の場合、例えば「チ ラアロヲルロタ アルラ ア」などと唱えたりします。この唱歌は楽器を習得するためには不可欠のものです。こうした唱歌で唱えた節の代りに、七五調の詞章をあてはめていったことにより、越天楽の旋律をもとにした歌が発生していったと考えられるということです。こうした「越天楽歌い物」が、七五調の今様体であればそれを「越天楽今様」と称することもあったのではないかと解説していらっしゃいます。この意味においては、「越天楽今様」は、越天楽の旋律に今様風の詞章をつけた歌い物ということで、現在のように固定された曲ではないということになります。

「越天楽歌い物」の成立について、今ひとつの指摘があります。それは、寺院の法会で行われていた雅楽に、声楽を付けることが行われ、こうしたもののひとつとして「越天楽歌い物」が成立したのではないかとことです。当時の人が、法会で聞く雅楽の節に言葉をつけていったわけです。

以上のことを復習しながら考えてみましょう。

- ・越天楽は唐から伝えられたということを知りたりますが、これは現在の越天楽ではないらしい。大陸とのつながりはむしろ薄いということになります。
- ・また、平調の越天楽は、本家本元ではないらしい。しかも、源氏物語などにでてくる今様は現在のものがあるかどうかは疑問である。
- ・それから、雅楽の唱歌や雅楽の節に詞章をつけて「越天楽歌い物」が成立した。それが七五調の今様体であれば「越天楽今様」と言われこともあったであろう。

そうすると現在教科書に掲載されている「越天楽今様」と昔から言われてきた「越天楽今様」はその示す範囲がまったく違ってきますね。現行の曲は、

「越天楽今様（歌詞は第2節まで）」（日本古謡）慈鎮和尚作歌

と指定されたことにより、固定されたということもできるかもしれません。

いったい教科書に掲載されている「越天楽今様」はナニモノなのでしょう。ますます、わからないことばかりになってしまいました。

しかし逆に、何かしらはっきりとしたものも見えてきたような気がします。まず、現在の「越天楽今様」については、わからないことがたくさんあるということがわかったこと。それから実に単純なことなのですが、昔からたくさんの人々が「越天楽」のふしに詞章をつけて行事を行ったり楽しんだりしてきたというこ

とです。「越天楽歌い物」の成立過程において「越天楽」の「今様」（あるいは「今様」の「越天楽」）が生まれてきたことを考えると、「ふし」に「詞」をあてはめて自分の「おもい」を「こえ」で「うたう」自由な感覚をもった人間の存在を感じるのです。「越天楽」の「今様」はたまたま越天楽のふしにつけられた今様であり、他にたくさんの今様があったこと。自分の知っているふしにことばをあてはめ、歌をうたった人々がたくさんいたこと。このことはまぎれもない事実だと思うのです。「越天楽今様」の私なりの「とらえ」が少し見えてきたような気がします。

4 「今様」とは

ということで、「今様」ですね。これもさけては通れなくなってしまいました。

「今様」は平安時代に流行した新しい歌謡の総称で、その呼称は『紫式部日記』などに見える「今様歌」（現代風の歌）の略で、前代の歌謡に対して、歌詞や曲調に「今めかしさ」、すなわち目新しく派手な魅力をもつ故に名付けられたものと思われる¹⁰。ということです。今の様、つまり当世風というのがもともとの意味だと思いますが、これが今様の「歌」の意味においても用いられたのでしょう。その時代の今風な歌を総称するわけですからかなりの範囲の曲種が含まれるものと思われます。また、11世紀後半から200年ほど、様々な階層の人々に愛されたといえますから、時代によってもその意味するところが少なからず違っていたことも予想されます。当時の貴族にとって、それまで愛好していた、催馬楽（さいばら）や朗詠（ろうえい）といったものが、ある種固定化されてきた中で、歌の内容や曲調が新鮮な今様が人気を得てきたのだと思います。なお、このような今様の意味は広義のものであり、この中には「只の今様」というように呼ばれた狭義の今様も存在します。

今様に関しては、有名な文献に後白河法皇（1127-1192）の編んだ「梁塵秘抄（りょうじんひしょう）」があります。「梁塵」の「梁」は家の梁のことで、柱のうえに渡して棟を支える横木のことで、この梁に積もった細かな塵が美しさに響いて舞い立つほどのすばらしい歌声を集めた大切な本というような意味だそうです。梁塵が舞い立つほどの音楽、魅力的ですね。しかし、梁塵秘抄は一部しか現存しておらず、歌詞はわかってもどのような音楽であったかは、わからないのです。

この中には、「神歌（かみうた）・法文歌（ほうもんうた）・長歌（ながうた）・只の今様（狭義の今様）・古柳（こやなぎ）・物様（ものよう）・田歌（たうた）・娑羅林（さらりん）・旧古柳（ふるこやなぎ）・片下（かたおろし）・早歌（はやうた）・足柄（あしがら）・伊地古（いちこ）・旧河（ふるかわ）・黒鳥子（くるとりこ）」といった今様の名前が見られますが、例えば、足柄・伊地古・旧河などのように、その呼称しかわからないものも多いのですが、現存の梁塵秘抄では、長歌（ながうた）10首、古柳（こやなぎ）1首、今様10首、法文歌（ほうもんうた）220首、四句神歌（しくのかみうた）204首、二句神歌（にくのかみうた）121首、合計566首を数えます（ただし、いくつか重複がありそれらをひくと560首）。

とはいえ五百にも及ぶ歌の世界は魅力的で、それらを声にだして読んでみるとこれまで「越天楽今様」からうけていた今様のイメージがまったく変わってしまいます。いくつか、紹介させてください。（数字は、「日本古典文学全集25 小学館 昭和51」による。）

- ・遊びをせんとや生まれけむ ^{たはぶ} 戯れせんとや生まれけん ^む
遊ぶこどもの声聞けば わが身さえこそ揺るがるれ (359)
- ・舞へ舞へ ^{かたつぶり} 蝸牛 舞はぬものならば ^{むま} 馬の子や牛の子に ^く 蹴ゑさせてん
踏み破らせてん ^{まこと} 実に美しく舞うたらば ^{はな} 華の園まで遊ばせん (408)
- ・この ^{みやこ} ごろ京に流行るもの ^は 肩 ^{かた} 当 ^{あて} 腰 ^{こし} 当 ^{あて} 烏帽子止 ^{えぼうしどめ} 襟の ^{えり} 堅 ^た つ型 ^{さび} 錆烏帽子 ^{えぼうし}
^{ぬの} 布打 ^の の下 ^{した} の袴 ^{はかま} 四幅 ^よ の指貫 ^{さしぬま} (368)

- このごろ京に流行るもの 柳黛髪々似而非鬢 しほゆき近江女 女冠者
長刀持たぬ尼ぞなき (369)
- 風に靡くもの 松の梢の高き枝 竹の梢とか 海に帆かけて走る舟
空には浮雲 野辺には花薄 (373)
- 茨小木の下にこそ 鼈が笛吹き猿奏で かい奏で 稲子磨賞で拍子つく
さて蟋蟀は鉦鼓の鉦鼓のよき上手 (392)
- 頭に遊ぶは頭風 頂の窪をぞ極めて食ふ 櫛の齒より天下る
麻笥の蓋にて命終はる (410)
- むよよよ蜻蛉よ 堅塩参らんさてゐたれ 働かで 簾篠の先に馬の尾纏り
合はせて かい付けて 童冠者ばらに繰らせて遊ばせん (438)
- いづれか貴船へ参る道 賀茂川箕里御菩薩池 御菩薩坂
畑井田篠坂や一二の橋 山川さらさら岩枕 (251)
- 思ひは陸奥に 恋は駿河に通ふなり 見初めざりせばなかなか
空に忘れて止みなまし (335)
- 君が愛せし綾蘭笠 落ちにけり落ちにけり 賀茂川に川中に
それを求むと尋ぬとせしほどに 明けにけり明けにけり
さらさらさやけの秋の夜は (343)

どうです？ずいぶん自由でしょう。「春のやよいの～」もちろん素敵ですが、そうした花鳥風月の世界に留まらずそれをゆうにとびこえて人間の様々な思いや人々の生活の様子を実に感性豊かに歌い上げている。言葉遊びがあり、恋の歌もある。蜻蛉や蝸牛の世界は子どもたちの心とも通じてきますし、風の歌にいたっては笑ってしまいます。様々な階層の人々のいわば「世俗のくちざさみ」であり、「『梁塵秘抄』の作者は、その時代の口語的発想や言い回しを縦横に駆使している」のです¹¹。

歌われた世界をコトバとして味わうだけでもおもしろいですが、これがみんな声となり歌となったわけですから、それを思うだけでわくわくしてきます。

詩の型も「春のやよいの～」といった七五調だけではなく、八五調やさらには不定型で作者が思うままにつくられているものもたくさんあります。そしてそこに共通しているのは日本語の韻律、リズム、響きの心地よさです。

タイムマシンでもない限り、当時の様子を見ることはできません。しかし、今様は確かに人々の口から口へと伝わった「うた」でした。生き生きと流れていた「こえ」の姿を今は聴くすべもありませんが、間違いなく「こえ」にのり人から人へと伝えられた想いであったわけです。一人一人の想いの表出、心のひだの表現が多くの人々の中で共有され時空を越えて新たな歌の文化を形成していったのです。当時は「今様合わせ」といったいわば今様の歌比べがあったそうで、貴族も庶民も一緒になって今様を楽しんでいたということですから。

歌謡今様は個の情を揺さぶり満たさなければ歌われなかったし、同時に集団性に根ざさなければ歌謡としての生命を保てなかったのである。集団性と個別性とは、今様を<こゑわざ>として生き生きと歌わせ続ける両輪の要素としてここにとらえられるのである¹²。

みんなで輪になって一人が歌い、それをまわりのひとが囃したてながら今様を楽しんでいる。そんな情景が浮かんできます。ここにも授業のヒントがかくされているように思えました。

歌は誰のものでもなく、人々の共有のものとして人から人へと歌い継がれ、また、変身をとげながら新たな生命が吹き込まれていったのでしょうか。こうした歌の変容は何故か子どもが歌うわらべうたにも似ているように思えます。わらべうたでは、遊びのちょっとした変化や動きの違い、地域の差によって同種の歌の様々な変容が観察されます。

このような観点から梁塵秘抄をみますと、何となく似たようなものが大変多いことに気がつきます。つまり、替え歌的な発想が大変良く機能していて、それがあたりまえに受け止められていたようなのです。

例えば、先に紹介した中では「このごろ京に流行るもの～」という出だしではじまるうたが2つありました。これなどは、冒頭の「流行るもの」に続いて様々な事柄が連ねられていたのでしょうか。

こうした「～のものは」という主題ではじめるものを「物は尽くし」というそうですが、これは「今様に見る著しい表現技法¹³」なのだそうです。この「物は尽くし」には他に「心の澄むものは」や「～へ参る道」「いずれか～へ参る道」などがあります。いずれにしても似通った発想でどんどんうたが生まれていったことがわかります。

替え歌的な発想がひろがったのは、こうした「うた」が七五音とか八五音に代表されるように一定の「型」もっていたせいであるともいわれます。うたが生まれる背景におけるこうした「型」の働きについて、作家の秦恒平氏は次のように言っています。

まずは定まった「型」にあります。次には「型」どおり限りなく歌い替え作り替えていく。その創作心理自体がいわゆる「替え歌」の動機と質を同じくしています。ものの初めに一つの「もとうた」があった。それが喝采された。その時に、よし自分も一つと、他の誰かべつの「うた」を創ります場合、決してただ歌詞の一部をもじっただけが「替えうた」になるのではない。それ以前に、心理的かつ作法的に「型」に倣うのでなければ作り替えの意味も体もなしません。素朴な真似ほど内容より形式に惹かれやすいものです¹⁴。

現代では、子どもたちのわらべ歌の世界を除けば、替え歌はほとんどなくなってきています。カラオケで、「これは自分の持ち歌だ」などと自信たっぷりに歌っていても、その歌はもともと他人がつくったものなのです。曲といえば、作詞家、作曲家がはっきりとした、独立した存在であり、それを真似て他の歌を創作するという事は明確な「著作権の侵害」となるわけです。しかし、うたをつくり歌うということは、本来もっとも自由なものであり、だれでもがその権利を認められ、発想や形を真似る中で自分の想像力を発揮し、感性を豊かにしてきた、人間としてとても大切な行為であったのです。

今回の授業の対象となる6年生も、わずか数年前までは(あるいは今でも)日常的に替え歌をつくって遊びを楽しんでいたはずです。そうした子どもたちがもともと持っていた「うた」をつくる力を目覚めさせ、豊かに成長させることはできないものでしょうか。そんなことを強く感じたわけです。

5 活動と教材の予想

以上の事柄を背景に、頭に浮かんでくる授業の活動や教材をおよそ考えてみます。

1) 「ことば」は「うた」をもっている。

(ことばの中にかくれているいろんなうたを発見しよう。)

ことばの持っている抑揚やリズムを生かした音楽(的)表現を特徴的にあらわすもの、口に出すことによって、自然にリズムやふしが生まれてくることばをおもいつくままあげてみます。

- ・どれにしようかな神様の言うとおりに
- ・一つ 二つ 三つ 四つ～
- ・二(に)の 四(し)の 六(ろ)の 八(や)の 十(と)

- おてらのおしょうさんがかぼちゃのたねをまきました
めがでてふくらんで はながさいたら じゃんけんぽん
- じゃんけんぽい あいこでしょ
- さいしょはグー じゃんけんぽん
- じゃんけんぽいぽいどっちひくの こっちひくの
- おせんべおせんべやけたかな ～
- ワンワン ピーチクピーチク コケッココー ～
- チョンチョンチョンチョンスーイッチョン
- だるまさんがころんだ だるまさんがころんだ
だるーまーさーんーがーこーろーんーだ
- せっせっせーの よいよいよい ～
- グリンピース グリングリンパリン パリンパリンチョリン
- いちぢく にんじん さんしょに しいたけ ごぼうに むかごに ～
- これっくらいの おべんとばこに おにぎりおにぎりちょっとつめて
- きょうもちゃばしら たってない まよなかはえいごでミッドナイト
わたしにほれなきゃ うそじゃない まよなかはえいごでミッドナイト
はらがへっても めしがない まよなかはえいごでミッドナイト¹⁵
- どっどど どどうど どどうど どどう
青いくるみも吹きとばせ
すっぱいくわりんもふきとばせ
どっどど どどうど どどうど どどう¹⁶
- きょうはうさぎのもちつきだ 年に一度のもちつきだ
ペッタンコ ペッタンコ ペッタンペッタンペッタンコ
おっこねて おっこねて おっこねおっこねおっこねて
とっついた とっついた とっついとっついとっついた
とーんとーんとんとんとん とーんとーんとんとんとん
とんとんとん とんとんとん とんとんとんとんとんとんとん
- 知らざあ言って聞かせやしょう 浜の真砂と五右衛門が 歌に残した盗人
(ぬすっと)の 種は尽きねえ七里ヶ浜 その白浪の夜働き ～
- 弁天：雪の下から山越に、まずここまでは落ちのびたが、
忠信：行く先つまる春の夜の、鐘も七つか六浦川、
赤星：夜明けぬうちに飛石の、洲先を放れ舟に乗り、～¹⁷
- 七五調 八五調でことばをつらねる（自己紹介、好きなものづくし、自然を愛でる、もの尽くしなど）。
その際ヒントを与える（例：このごろ巷ではやるもの～。いずれかおうちへかえるみち～。○○○であ
そぶは○○○○○～。etc.)

やはり、何と言っても梁塵秘抄ですね。

- 舞へ舞へ蝸牛 舞はぬものならば 馬の子や牛の子に蹴ゑさせてん
踏み破らせてん 実まことに美しく舞うたらば 華はなの園そのまで遊ばせん
- このごろ京みやこに流行はるもの 肩かた当あて腰こし当あて烏帽子えぼうし止どめ 襟えりの堅たつ型さびえ錆ぼうし烏帽子
- 布打ぬのうの下したの袴はかま 四幅よの指貫さしぬき
頭かづべに遊ぶかしらは頭風じらみう 頂なの窪くぼをぞ極まめて食くふ 櫛くしの齒あまくだより天下あまくだる
麻あし笥ごけの蓋ふたにて命いのち終あはる

2) 「うた」は「ことば」をまっっている。

(うたの中にかくれていることばをさがそう。うたにあわせてことばをつけてみよう。)

うた(ここでは、ふしと受けとっていただいて結構ですが)をきいて即興的にことばで答えたり、ふしにことばをつけたりします。

- わらべうた風の間答をする(先生と児童、児童同士)

問：● ● ● ● ちゃん。 答：なー あー に○
(|ソーラ|ソーソ|ラ○|) (|ラー|ソー|ラ○|)

問：あーそ びーま しょ○
(|ミーソ|ラーソ|ラ○|)

問：あーな たーの おーな まーえ なーん てー の○
(|ソーラ|ソーソ|ソーソ|ソーソ|ラーラ|ソー|ラ○|)

答：●ー ●ー ●ー とー もう し・ます○
(|ラー|ソー|ソー|ソー|ラー|ラー|ラ○|)

- 替え歌をたくさん紹介する。子どもたちから採集する。つくってみる。

明かりをつけましょ ぼんぼりに

どかんとぼくはつ はげあたま

五人囃子も死んじゃった

今日はかなしいひなまつり

(ひなまつりのふしでうたいます。少し品にかけますが、子どものタフなエネルギーです。次も同様、「森のくまさん」です。)

あるひんけつ もりのかんけり

くまさんにんにく であったこやき

はなさくもりのみちりとり くまさんにであったこやき

くまさんのんびり いうことにゃろめ

おじょうサンドイッチ おにげなサインペン

すたこらさっささのさいころ すたこらさっささのさんけつ

ところがんたん くまさんがっこう

あとからんらん ついてくるんるん

とことことことことんかつ とことことことことんねる

- 替え歌をつくってみる。

既成のわらべうたやふし(例：越天楽のふし)を用いる。歌詞を途中まで与えるなどして続きをつける。あるいは、素朴なふしに自分だけのことばを(即興的に)のせる。(自己紹介、すきなものづくり、自然を愛でる、もの尽くしなど)その際、梁塵秘抄の発想を生かす。(例：このごろ学校ではやるもの～。いずれかおうちへかえるみち～。)

- 越天楽のふしに、七五調、八五調のことばをのせる。

3) 自分のつくったうたを歌い友だちと交流する。

グループやクラスで今様大会、今様合わせをし、自分のつくったうたを歌ったり、即興的にうたをつくったりする。

本当に思いっくまにあげてみました。こうしたことが授業のもととなっていきます。

6 他教科における既習内容との関連

子どもたちの既習内容を押さえるとともに、他教科から授業の発想を得たいと思います。5年生時、国語科で次のような事柄を学習していました¹⁸。

- 目次のあとに、「あめ」(山田今次)という詩があります。

あめ あめ あめ あめ
 あめ あめ あめ あめ
 あめは ぼくらを さんざか たたく
 さんざか さんざか
 さんざか さんざか ～

教科書では、「郡読をしましょう」というよびかけがあり、人数を変えたり、読むところをくふうしたりして音読する方法が紹介されています。言葉の響きやリズムが詩のイメージをさらにふくらませていきます。こうなるともう音楽ですね。(pp. 4-5)

- ・「はたはたのうた」(室生犀星)、「山のあなた」(カール=ブッセ、上田敏訳)などの素敵な詩もありました。また、ここでは「いふ」「あらはれる」「おもゆ」「かへり」「なほ」といった歴史的仮名づかいが学習されています。(pp. 86-87)

教科書の下巻も見てみましょう¹⁹。

- ・「木竜うるし」(木下順二)には、オノマトペがたくさん用いられています。(pp. 4-21)
 「ズイコズイコ。」
 「ドブン。ブクブクブク。」
 「ピーチクピーチク。」

声に出すだけで、音楽が生まれてきそうです。これらは、作品の随所で実に効果的に用いられています。

- ・「なぞなぞうたを作ろう」という単位では、七音五音の詩が紹介されています。また、ここではこうした詩をつくる学習もしてきています。

きみのあとから ぼくがいき
 ぼくのあとから きみがくる
 おなじかおした きみとぼく
 どこへいくのも いっしょだが
 きみは いつも みぎがわで
 ぼくは いつも ひだりがわ (中川李枝子 作) (p. 22)

- ・「言葉のアクセントとリズム」という単位では、名前の通りアクセント、リズムがポイントですからもっとダイレクトに音楽科にせまってきます。また、ここでも七五調の詩が紹介されており、読むことにより言葉のリズムを味わう学習が行われます。(p. 25)

せいては事をし損じる
 目は口ほどにものを言う
 笑うかどには福きたる
 骨折り損のくたびれもうけ

例えば、「笑うかどには福きたる」のあとにつづけてうたをつくるのも面白いですね。

笑うかどには福きたる
 笑わぬかどには福こない
 あなたはいつもしかめつら
 わたしにふられてしまうわよ

(伊野作 越天楽のふしで速めにうたってみてください。)

・「求める心を」という単位では、金子みすゞの詩がリズムを刻んで心に響きます。(p.117)

露

誰にも言はずに
おきませう。

A- 1

朝のお庭の
すみっこで、
花がほろりと
泣いたこと。

A- 1

A- 2

もしも噂が
ひろがって、
蜂のお耳へ
はいたら、

B

わるいことでも
したやうに
蜜をかへしに
ゆくでせう。

(A- 1でも可)

B (A- 2でも可)

詩のリズムをそのまま越天楽のふしにのせてうたうこともできます。

例えば、「はるのやよいのあけものに」のふしをA-1、「よものやまべをみわたせば」のふしをA-2、「はなざかりかも」以下のふしをBとした場合、相当する部分を上に記しておきました。速めのテンポで歌ってみてください。やさしく丁寧に歌えば、素敵な「うた」に変身です。

こうして教科書を見てみると、子どもたちには今回の学習の下地ができあがっているようですね。あとは「ふし」にのせる作業ですね。

7 宮沢賢治の「雪わたり」における「うた」の誕生

おもいがうたになり、そのうたが相手に伝わってあたらしいうたが生まれるさまをもっともよく表現した作品として、宮沢賢治の「雪わたり」がありました (pp.50-69)。特に印象的でしたので、項を起こして記述します。

雪国の子どもたちは初春、晴れた日にすっかり表面が凍ってしまった雪の上をあるいて渡り遊びます。賢治の作品は「雪わたり」ですが、新潟では、「凍(し)みわたり」ともいっています。雪国では、このしみわたりの時に子どもたちがうたをうたうのです。「しみわたりの歌」は新潟県にもたくさんあります²⁰。

作品の冒頭に登場する

「かた雪かんこ、しみ雪しんこ。」

は、この「しみわたりの歌」に間違いありません。

賢治のふるさとである岩手のわらべうたを調べますと、次のような歌が登場します。

かた雪かんこ、凍み雪しんこ、
しもどの嫁コァ、ホーイホイ。 (九戸郡九戸村)

かた雪かんこ、凍み雪しんこ、
こんこんの寺さ、小豆ばっとはねた、
小豆ァ凍み凍み凍み通って、豆ココろころ、
小豆そろそろ。 (和賀郡和賀町)²¹

おそらく賢治もこうした歌を子どもの頃に歌いその思いを作品の原点としたのでしょう。

さて、この作品でうたが生まれる様子がとても興味深いのです。詳細は語れませんが、四郎とかん子の兄妹が、子ぎつねの紺三郎とうたを生み出す過程をみていきましょう。

「お日様が、真っ白に燃えてゆりのにおいをまき散らし、また雪をぎらぎら照ら」す朝、ふたりは、雪ぐつをはいてキックキックキック、歌いながら野原にでます。

「かた雪かんこ、しみ雪しんこ。」

森の近くに来ると森に向かって高く叫びます。

「かた雪かんこ、しみ雪しんこ。きつねの子ぁ、よめいほしい、ほしい。」

すると森の中から声がします。白いきつねの子です。

「しみ雪しんしん、かた雪かんかん。」

ここから、会話がはじまります。

(四郎は～さけびました。)

「きつねこんこん白ぎつね、およめほしけりゃ、とってやろよ。(四郎)

(するときつねが、～言いました。)

「四郎はしんこ、かん子はんこ、おらはおよめはいらないよ。」(白ぎつね)

(四郎が笑って言いました。)

「きつねこんこん、きつねの子、およめがいらなきゃもちやろか。」(四郎)

(きつねの子も、～言いました。)

「四郎はしんこ、かん子はんこ、きびのだんごをおれやろか。」(白ぎつね)

(かん子も、あまり面白いので、～そっと歌いました。)

「きつねこんこんきつねの子、きつねのだんごはうさのくそ。」(かん子)

言葉の一つ一つに翼が生え、うたとなって今にも飛んでいきそうな感じですが、そして四郎ときつねの会話をきいていたかん子が、「あまりおもしろいので」ついに歌ってしまうのです。うたがうまれる瞬間がみごとに描き出されているではありませんか。

さて、四郎、かん子、白ぎつねのコミュニケーションは、互いに触発されて次々とうたを誕生させます。

しみ雪しんこ、かた雪かんこ、
野原のまんじゅうはポッポポポ。
よってひょろひょろ太右衛門が、
去年、三十八、食べた。
しみ雪しんこ、かた雪かんこ、

野原のおそばはホッホッホ。
よってひょろひょろ清作が、
去年、十三ばい食べた。(白ぎつね)

きつねこんこんきつねの子、
去年きつねのこん兵衛が、
左の足をわなに入れ、
こんこんばたばたこんこんこん。(四郎)

きつねこんこんきつねの子、
去年きつねのこん助が、
焼いた魚を取ろとして、
おしりに火がつききゃんきゃんきゃん。(かん子)

愉快なバリエーションの世界です。こうしたうたの誕生は、先述した秦恒平氏指摘するところの「替え歌の動機と質を同じにしている」ことはいうまでもありません。梁塵秘抄の精神との共通点を強く感じてしまいます。

さて、この作品についてはさらに肝心なことをお話ししなければなりません。それは、作品中に通奏低音のように流れている次のフレーズです。

キック、キック、トントン。
キック、キック、トントン。
キック、キック、キック、キック、トントントン。

このリズムカルなオノマトペの一群は、それだけで一つの音楽の世界を作り出しているのですが、重要なことは、この「キック、キック、トントン」が、うたを生み出すもとであり、二人と白ぎつねがうたを共有するための基本のリズムとなっていることです。このことについて文中の賢治の表現に注目してみましょう。

きつねは、おかしそうに口を曲げて、キックキックトントンキックキックトントンと足ぶみを始めて、しっぽと頭をふってしばらく考えていましたが、やっと思いついたらしく、両手をふって調子をとりながら歌い始めました。

きつねは自身の中にうたの基本のリズム「キック、キック、トントン～」を取り入れ繰り返しながら、それに言葉を当てはめていく作業をしているのです。そして、歌う時は、そのリズムにのって「両手をふって調子を取りながら」歌うわけです。共通に認識された歌のリズムに共通に認識された心情から生まれる自分のことばを作り出し、身体を通して発露する作業です。

作り出されたうたとリズムを対応して見てください。

まず、白ぎつねのうたです。

し・み、ゆ・き、しんこ、か・た、ゆ・き、かんこ、
キック、キック、トントン、キック、キック、トントン、
の・は、ら・の、ま・ん、じゅうは、ポッポッポ、
キック、キック、キック、キック、トントントン

四郎のうたも見てみましょう。出だしが、ちょっと跳ねているほうがよさそうすね。

○・き、つ・ね、こんこん、き・つ、ね・の、子 ○、
キック、キック、トントン、キック、キック、トントン、

○・きょ、ね・ん、き・つ、ね・の、こんべえが、
キック、キック、キック、キック、トントントン、

ひ・だ、り・の、あしを、わ・な、に・入、れ ○、
キック、キック、トントン、キック、キック、トントン、

こ・ん、こ・ん、ば・た、ば・た、こんこんこん、
キック、キック、キック、キック、トントントン、

考えてみれば子どもの頃、つまりうたをたくさん自然に生み出した頃、こうやうたの型を身体に納め、ことばを産みだし、替え歌を作ったわけです。そして、今様の世界もまたそうでした。このリズムから、きつねたちはさらに新しいうたを生み出します。

昼はカンカン日の光
夜はツンツン月明かり
たとえ体をさかれても
きつねの生徒はうそつくな

「雪わたり」には、まだまだ重要なポイントがかくされています。

四郎とかん子がきつねたちに「げんとう会」に招待されました。そこで二人はきつねたちのうたに出会うのですが、そこでは四郎のつくったうたがすでに共有されていました。

きつねこんこんきつねの子、
去年きつねのこん兵衛が、
左の足をわなに入れ、
こんこんばたばたこんこんこん。

一つのうたがみんなのものとなっていく。みんなで輪になってうたをそれぞれのものにしていくわけです。(そしてまた新しいうたが生まれる。)

これを聞いた四郎がかん子に耳打ちします。

「ぼくの作った歌だねい。」

そうです、これは壮大なバリエーションの中で確かに「四郎が作った歌」なのです。

「作曲」という言葉とはニュアンスを異にする「うた」の創出です。日本語の文化が生み出した「うた」の誕生劇といってもよいかもしれません。

8 授業の発想

越天楽今様やそこから発展して、たくさんのことを考えてきました。ここまできて（あるいはその途中で）授業の発想がいくつか浮かんできました。まだ、シャボン玉のようなはかなく頼りないものですが、思いっくまに記してみます。



9 授業の枠組み

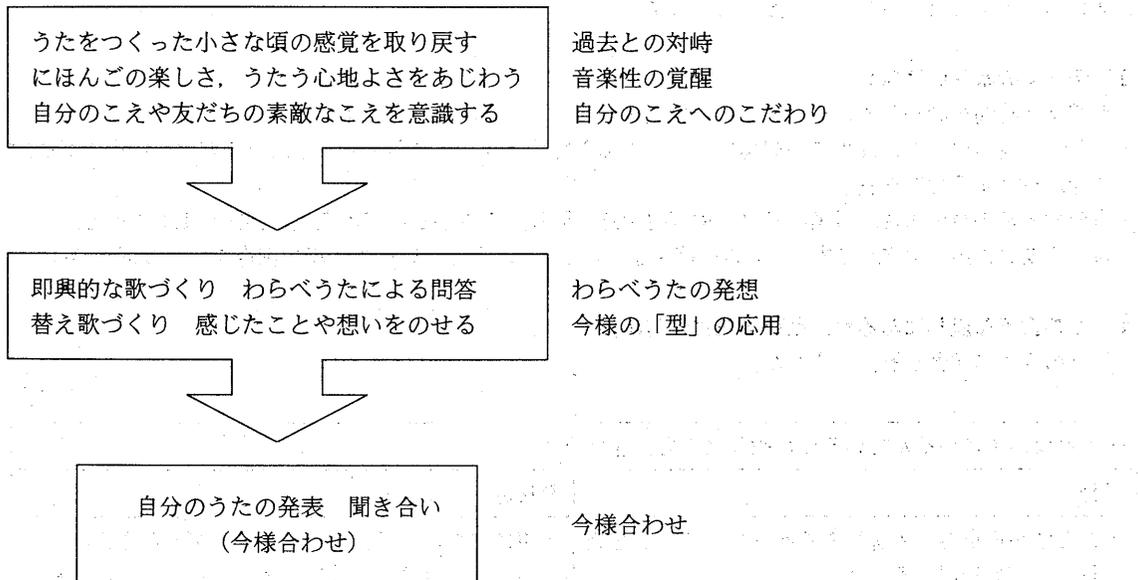
これらのことがらを取り入れて、授業の大枠を次のようにしてみました。

ねがい

今様を楽しんだ人々のころとわざひたる

- ・子どもが、自分の「おもいや感じたこと」を自分の「ことば」で「うた」とし、自分の「こえ」にのせて、友だちにつたえ、共有する。
- ・自身の「ことば」と「こえ」が「うた」となり、友だちに伝わり呼応するさまを子どもたちと体験したい

およその流れ



10 授業構成案²²

1) どのようなテーマか

「私の越天楽今様」

「越天楽今様」のふしにのせて、梁塵秘抄の中の人々のように、自分の感じたことを「うた」にし、友だちと共有させたいという願いのもと、「私」の越天楽「今様」としました。

2) なぜこのようなテーマか

「うた」を生み出す、「うた」をうたいだす、というのは人間のごく自然な行為です。わらべうたをはじめ子どもたちに観察される歌の創出や今様などに見られる歌謡の誕生は、日常の生活において、「ことば」としての「型」や「ふし」としての「型」をなぞるといふ行為の中で、作者の感性が周囲と共振しながら創

造的に行われた結果であると考えます。ここでいう「ことばとしての型」とは、日本語の持つ抑揚やリズムが生かされた定型（七五調など）・不定型を含めた型であり、「ふしとしての型」とは、「うた」を生み出す際に作者が何らかの形でよりどころとする既成の「ふし」です。

無数にあるわらべうたはこの意味において壮大なバリエーションと考えることもできます。子ども世界でごくあたりまえのように行われているこうした行為は、本来音楽を創出する最も重要な過程であり、日本の音楽文化の根幹を支えてきましたが、現代ではおよそ小学校の中・高学年の年齢になると消えてしまい、残念ながらその発展性を失っています。

しかしながら、小さな頃にうたを無意識に作り出した感覚を取り戻し、過去と対峙させながら、日本語の楽しさやうたう心地よさを味わい、さらに友だちの声を意識する学習や、「型」をなぞることによる即興的なうたづくりや発表を授業において組織すれば、本来持つ自然な創造力は覚醒され、生涯にわたって自分の「ことば」で「うた」を生み出すことのできる「種」を植え付けることができると考えます。

こうした問題意識に立ち、本題材では、「越天楽今様」を「越天楽」のふしに「ことば」をのせた「今様」としてとらえる中で、6年生というこの時期において、子どもころの感覚を伸長させ、一定の「ふし」に自身の日本語の「ことば」を自然な形でのせる楽しみを味わいながら「うた」をつくるいわば「今様」的な音楽の創造と享受を実現したいと思っています。

3) テーマのねらいは何か

授業は3時間を計画しています。この中で実現したいことは次の3点です。

- ・自分や友達の声、ことばの持つ抑揚やリズムに関心を持たせ、それらを生かした声の表現や創作を意欲的に行おうとする態度を養う。
- ・自分や友達の声のよさ、言葉のリズムや抑揚を感じ取り、ふさわしい声の表現や創作を工夫させる。
- ・自分や友達の声のよさ、言葉のリズムや抑揚を生かして、ふさわしい声の表現や創作をする技能を伸ばす。

4) どのような流れになるか、用いる教材は何か。

以下の3つの学習を計画しました。

①ことばの中にひそんでいるうたやリズムを引きだそう。	
活動	教材例
<ul style="list-style-type: none"> ・ことばから自然に生まれてくるリズムやふしを発見し、声で表現する。(2) ・「雪わたり」(宮沢賢治) にでてくるうたを想像・再現し、歌って楽しむ。(4) 	<ul style="list-style-type: none"> ・声に出すことで自然にふしやリズムが生まれてくることば(例:どれにしようかな、じゃんけんぽい、うさぎのもちつき、白浪五人男のせりふ、など) ・国語科での既習教材「雪わたり」(宮沢賢治) にでてくる種々のうた。 ・しみわたり歌各種
②ふしの中に自分の思いを入れてうたおう。	
活動	教材例
<ul style="list-style-type: none"> ・教師の提供する題に七五調、八五調などで即興的にことばをつらね、自分のうたをつくる。(4) ・自分の伝えたいこと、感じたことをリズムカルなことばにする。(4) ・越天楽のふしに自分のつくったことばを合わせてうたう。(4) 	<ul style="list-style-type: none"> ・梁塵秘抄による今様歌、既習の詩、自己紹介やもの尽くしなどによる素案の提供。(例:あなたのおなまえなんですか、このごろ学校ではやるもの?。教師の自作品、金子みすゞの「露」) ・越天楽のふし、児童の自作品。

③今様合わせをしよう。	
活動	教材例
<ul style="list-style-type: none"> 自分のつくったうたの表現を工夫する。(2)(3) 代表を決定する。(2)(3) 今様合わせを行う。(2)(3) 	<ul style="list-style-type: none"> 児童自作品、越天楽のふし。

5) 学習指導要領との関連はどうか

この学習は、学習指導要領の多くの内容からなっています。しかし、その中で、以下の内容に重点を置こうと思います。(下線筆者)なお、前記表中に対応する内容の番号 [(2)(3)(4)] を挿入してあります。

(2) 曲想や音楽を特徴付けている要素を感じ取って、工夫して表現できるようにする。

ア 歌詞の内容や楽曲の構成を理解して、それらを生かした表現の仕方を工夫すること。

イ 拍の流れやフレーズ、音の重なりや和音の響きを感じ取って、演奏したり身体表現をしたりすること。

(3) 歌い方や楽器の演奏の仕方を身に付けるようにする。

ア 呼吸及び発音の仕方を工夫して、豊かな響きのある、自然で無理のない声で歌うこと。

(4) 音楽をつくって表現できるようにする。

ア 曲の構成を工夫し、簡単なリズムや旋律をつくって表現すること。

イ 自由な発想を生かして表現し、いろいろな音楽表現を楽しむこと。

6) 評価規準をどのように設定するか

具体的な評価規準は次のように設定しました。

今回の学習においては、歌唱と創作に焦点をあてた授業が実施されます。先般国立教育政策研究所より報告のあった「評価規準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料—評価規準、評価方法等の研究開発—」²⁹より、本題材に直結する内容のまとめりごとの評価規準とその具体例は以下の通りです。なお、下線は題材の評価規準及び学習活動における具体的評価規準に深く関係していることを示します。

	ア 音楽への関心・意欲・態度	イ 音楽的な感受や表現の工夫	ウ 表現の技能
内容のまとめりごとの評価規準	<p>【歌唱】<u>創造的に歌唱表現にかかわり、歌唱活動への意欲を高めるとともに、その経験を生活に生かそうとする。</u></p> <p>【創作】<u>創造的に音楽づくりにかかわり、音楽をつくって表現する活動への意欲を高めるとともに、その経験を生活に生かそうとする。</u></p>	<p>【歌唱】<u>斉唱や合唱などによる歌唱表現及び歌声のよさや美しさを感じ取るとともに、歌詞の内容や楽曲の構成を理解して表現を工夫し、拍の流れやフレーズ、音の重なりや和声の響きなどを感じ取り、それらを生かした表現の工夫の仕方を工夫したり、身体表現したりしている。</u></p> <p>【創作】<u>様々なリズムや旋律、曲の構成のおもしろさ、いろいろな声や音の響きのよさや美しさを感じ取るとともに、音楽表現のイメージを膨らませ、それらを生かした音楽づくりの仕方を工夫している。</u></p>	<p>【歌唱】<u>範唱や範奏を聴いたり楽譜を見たりして歌うとともに、ハ長調及びイ短調の旋律を視唱している。また、呼吸及び発音の仕方を工夫して、豊かな響きのある自然で無理のない声で歌っている。</u></p> <p>【創作】<u>曲の構成を工夫し、簡単なリズムや旋律をつくって表現するとともに、自由な発想を生かして表現し、いろいろな音楽表現を楽しむなど、工夫して音楽をつくっている。</u></p>

評価規準の具体例	<p>【歌唱】</p> <ul style="list-style-type: none"> 豊かな響きのある自然で無理のない声で歌う<u>ことに関心</u>をもち、美しい声で歌おうとしている。 自分の表現意図や思いが表現できるように<u>繰り返し歌おう</u>としている。 自分自身の表現意図をもち、<u>集団で協力</u>して歌唱表現の仕方を工夫しようとしている。 <p>【創作】</p> <ul style="list-style-type: none"> イメージを豊かに膨らませ、自分自身の<u>音楽</u>をつくり出そうとしている。 自分自身の<u>感じ方</u>や考え方を生かしながら、<u>友達と協力</u>して音楽づくりを進めようとしている。 	<p>【歌唱】</p> <ul style="list-style-type: none"> 友達の表現を聴き、その<u>よさや美しさ</u>を感じ取っている。 範唱や友達の歌声を聴いて、<u>自然で無理のない声</u>、きれいな声、豊かな響きのある声による美しい歌唱表現を求めて、歌い方を工夫している。 歌詞の表す情景や気持ちを想像したり、<u>言葉の意味や歌詞の内容</u>を理解したりするとともに、歌詞を旋律、<u>歌詞とリズム</u>、歌詞と和音の関連など楽曲の構成を理解して、それらを生かした歌唱表現の工夫をしている。 歌詞の<u>もつリズム</u>や<u>ことばの抑揚</u>などに気を付けながら、きれいな発音に心掛けて、表現に生かしている。 <p>【創作】</p> <ul style="list-style-type: none"> 音楽を聴くことや音楽遊びを通して、<u>リズムや旋律</u>、<u>曲の構成</u>のおもしろさを感じ取っている。 <u>自由な発想</u>を生かした音楽づくりを通して、音楽表現のイメージを豊かに膨らませている。 いろいろな声や音の響きの<u>よさや美しさ</u>を感じ取り、それらを生かした多様な表現の仕方を工夫している。 さまざまな<u>リズムや旋律</u>、<u>曲の構成</u>のおもしろさを生かした表現の仕方を工夫している。 	<p>【歌唱】</p> <ul style="list-style-type: none"> <u>自分の声の持ち味</u>を生かし、伸び伸びとした声で歌うとともに、曲想に合った<u>自然な歌い方</u>を工夫して歌っている。 豊かで美しい歌唱表現を求め、曲想表現に合う<u>呼吸法や発音の仕方</u>、<u>歌詞の内容にふさわしい発音</u>に気を付けるとともに、母音や子音、濁音や鼻濁音などの発音に気を付けて歌っている。 <p>【創作】</p> <ul style="list-style-type: none"> 様々な<u>音やリズムの組合せ</u>、<u>曲の構成</u>を工夫して表現している。 <u>言葉のリズムや抑揚</u>を生かして、まとまりのある旋律をつくっている。

これらを題材のねらいと照らし合わせ、次のように題材の評価規準と学習活動における具体的評価規準を設定しました。

	ア 音楽への関心・意欲・態度	イ 音楽的な感受や表現の工夫	ウ 表現の技能
題材の評価規準	自分の声、ことばの抑揚やリズムを生かしながら、友達と協力して、自然で無理のない声で意欲的に表現や創作をしている。	自分や友達の声のよさを感じ取るとともに、言葉のリズムや抑揚を生かし、自然で無理のない声の表現を工夫している。	自分の声の持ち味を生かし、自然で無理のない声で、発音やことばの抑揚やリズムを工夫して声で表現をしたり、まとまりのある音楽づくりをしたりしている。

学習活動における 具体的評価規準	①ことばの抑揚やリズムに興味を持ち、繰り返し表現しようとしている。(歌唱)	①ことばの抑揚やリズムを感じ取り、それらを生かした表現の工夫をしている。(歌唱)	①「雪わたり」のうたにあることばの抑揚やリズム、曲の構成を生かして、歌をつくっている。(創作)
	②友達と協力し、「雪わたり」のうたづくりに取り組んでいる。(創作)	②「雪わたり」のうたにあることばの抑揚やリズム、曲の構成を感じ取って、歌づくりを工夫している。(創作)	②言葉の抑揚やリズムを生かして、まとまりのある曲をつくらることができる。(創作)
	③自分の発想を生かし、意欲的に音楽を作り出そうとしている。(創作)	③越天楽のふしの特徴を感じ取って、それに合う曲づくりをしている。(創作)	③声の持ち味やことばを生かし、自然で無理のない声で歌っている。(歌唱)
	④声の持ち味やことばを生かし、繰り返し表現しようとしている。(歌唱)	④声の持ち味やことばを生かし、自然で無理のない声で歌う工夫をしている。(歌唱)	

7) 授業の全体計画、そして評価の計画と方法は？

時	ねらい・学習活動	具体的評価規準	評価のポイント	評価方法
1	①ことばの中にひそんでいるうたやリズムを引きだそう。 ・ことばから自然に生まれてくるリズムやふしを発見し、声で表現する。 ・「雪わたり」(宮沢賢治)にでてくるうたを想像・再現し、つくって楽しむ。	アー① イー① アー② イー② ウー①	→繰り返し表現している。 →表現の工夫をしている。 →協力して取り組む。 →抑揚、リズム、構成を感じ取って工夫している。 →抑揚、リズム、構成を生かした歌づくりをしている。	表現の様子や工夫を観察 協力の様子と表現の工夫を観察 学習プリント1による確認 演奏による聴取
2	②ふしの中に自分の思いを入れてうたおう。 ・教師の提供する題に七五調、八五調などで即興的にことばをつらね、声に出して発表する。 ・自分の伝えたいこと、感じたことをリズムカルなことばにする。 ・越天楽のふしに自分のつくったことばを合わせてうたう。 ・発表のための練習をする。	アー③ イー③ ウー②	→発想を生かし、意欲的に音楽を作り出そうとする。 →ふしに合う曲作りをする →まとまりのある曲をつくっている。	取り組みの態度を観察 工夫している様子を観察 学習プリント2による確認
3	③今様合わせをしよう。 ・自分のつくったうたの表現を工夫する。 ・自分のつくったうたをグループ内で発表し、代表をきめる。 ・今様発表会を行う。	アー④ イー④ ウー③	→繰り返し表現しようとしている。 →自分の声、作品を生かしている。自然な声で歌うの工夫をしている。 →自分の声、作品を生かし、自然な声で歌っている。	練習の様子を観察 工夫の様子を観察 学習プリント3による確認 技能を観察・演奏により確認

このように評価の計画を書き出すと一見大変複雑に見えますが、上の表をよく見ていただくと、太枠に囲まれた中で、それぞれおよそ共通する内容を観点別に評価していることがわかっていただけたと思います。

8) 実際の展開はどのように予想しているか?

1 時間目の展開案

学習内容【教材】	教師の働きかけ	児童の活動	具体的評価規準及び【評価方法】
ことばの中にひそんでいるうたやリズムを引き出そう。			
<p>◎ことばの抑揚やリズムの感受とそれらを生かした表現</p> <p>○【数を数えることば、わらべうた、歌舞伎「白浪五人男」の七五調のせりふ、「どっどどどどうど〜」の表現(風の又三郎から)など。】</p> <p>○【伝承されてきた「しみわたりの歌」や国語科での既習教材「雪わたり」及びそこに記載されてる次のリズムやうた。「キック、キック、トントン」「しみ雪しんこ、かた雪かんこ、野原のまんじゅうはポッポ。よってひょろひょろ太右衛門が、去年、三十八、食べた。」「きつねこんこんきつねの子、去年きつねのこん兵衛が、左の足をわなに入れ、こんこんばたばたこんこん。など。】</p>	<p>○声に出すことで、自然にふしが生まれてくることばを提示し、表現させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平易なものは、最初から児童に表現させる。 ・必要において教師が師範する。 <p>○「雪わたり」(宮沢賢治)に出てくるうたを想像・再現させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「雪わたり」の話や「しみわたりの歌」の紹介をする。 ・「雪わたり」の冒頭部を「かた雪かんこ、しみ雪しんこ。」のフレーズを意識しながら朗読する。 ・四郎、かん子、紺三郎のうたをリズム(キック、キック、トントン)に注目させて実際にうたにさせる。 ・「雪わたり」の「げんとう会」を想定し、グループ毎に発表させる。 	<p>○提示されたことばの抑揚やリズムに注意し、声に出して表現する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・クラス全員で読んだり、個人で発表したりする。 ・表現の仕方を工夫して発表する。 <p>○「雪わたり」(宮沢賢治)に提示されているリズムや歌詞をいかして歌にする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「雪わたり」の話をきいて様子を想像したり、歌の感覚をつかんだりする。 ・それぞれのうたをグループにわかれて協力しながら想像、再現する。その際「キック、キック、トントン」のリズムを生かす。 ・ことばの抑揚やリズムを生かした表現を工夫し、練習してグループ毎に発表する。 	<p>アー①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ことばの抑揚やリズムに興味を持ち、繰り返し表現しようとしている。 <p>イー①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ことばの抑揚やリズムを感じ取り、それらを生かした表現の工夫をしている。 <p>【表現の様子や工夫を観察】</p> <p>アー②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・友達と協力し、「雪わたり」のうたづくりに取り組んでいる。 <p>イー②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「雪わたり」のうたにあることばの抑揚やリズム、曲の構成を感じ取って、うたづくりを工夫している。 <p>【協力の様子と表現の工夫を観察、学習プリントによる確認】</p> <p>ウー①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・歌詞の内容にふさわしい発音、ことばの抑揚やリズムを生かした歌をつくっている。 <p>【演奏の観察と聴取、学習プリントによる確認】</p>

2時間目の展開案

学習内容【教材】	教師の働きかけ	児童の活動	具体的評価規準及び【評価方法】
ふしの中に自分の思いを入れてうたおう。			
<p>◎ふしに合うことばを入れて、自分のうたを表現する。</p> <p>○【児童のつくった替え歌、「このごろ学校ではやるもの～」「このごろ巷ではやるもの～」「あなたがいちばんすきなもの～」などの題、越天楽のふし、教師の自作品、「露」（金子みすゞ）、「このごろ京にはやるもの」「頭に遊ぶは頭風～」「遊びをせんとや生まれけむ～」「君が愛せし～」などの梁塵秘抄のうた。】</p> <p>○【越天楽のふし、教師の自作品、児童の自作品、梁塵秘抄による今様歌など】</p>	<p>○題を出し、七五調、八五調などで即興的にことばをつくらせる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・替え歌の話題を出し、教師が紹介をしたり、児童の替え歌体験を引き出したりする。 ・教師自作の替え歌を越天楽のふしで歌う。 ・教科書の越天楽今様を紹介し、歌わせる。 ・梁塵秘抄を紹介し、声にだして読ませる。 ・「このごろ巷で流行るもの～」などの題を提供し、児童個々の思いを七五調、八五調を中心にことばにさせる。 <p>○越天楽のふしにことばを当てはめて作品を作らせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教師の自作や児童の作品をふしにのせて様々な歌い方を紹介する。 ・グループで協力させ、作品づくりをする。 ・越天楽のふしにのせて発表させる。 	<p>○提示された題にそって、七五調、八五調などでことばをつらね、声に出して表現する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教師の話聞いて、自分や友達が作った替え歌を思い出す。 ・ふしの中にことばを入れて思いをつたえることができることを理解する。 ・越天楽今様のふしを歌えるようになる。 ・教師とともに声にだして繰り返し読んで楽しむ。 ・「もの尽くし」や教師の作品をヒントにしなが、個々の思いを七五調、八五調の作品にする。 <p>○越天楽のふしにことばをあてはめながら曲をつくる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教師の作品や友達の作品を聞いて参考にする。 ・言葉の内容、抑揚やリズムを考えて、グループごとに作品をつくる。 ・越天楽のふしに乗せて練習をし、グループごとに発表をする。 	<p>アー③</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の発想を生かし、意欲的に音楽を作り出そうとしている。 <p>【取り組みの態度を観察、学習プリント2による確認】</p> <p>イー③</p> <ul style="list-style-type: none"> ・越天楽のふしの特徴を感じ取って、それに合う曲づくりをしている。 <p>【工夫している様子を観察、学習プリント2による確認】</p> <p>ウー②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・言葉の抑揚やリズムを生かして、まとまりのある曲をつくることができる。 <p>【技能を観察により確認、学習プリント2による確認】</p>

3時間目の展開案(本時)

学習内容【教材】	教師の働きかけ	児童の活動	具体的評価規準及び【評価方法】
今様合わせをしよう。			
<p>◎自分のつくったうたの表現を工夫して、発表する。</p> <p>【越天楽今様、教師の自作品、梁塵秘抄による今様歌、児童の作品、「露」(金子みすゞ)など】</p> <p>【それぞれの児童の自作品】</p>	<p>○児童のつくったうたを練習させ、表現を工夫させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> 越天楽のふしを歌い、思い出させる。 できあがった作品をいくつか紹介し、教師が歌ってみせる。その際、様々な表現の仕方を紹介したり、自分に合った音の高さの工夫について指摘する。 児童個々の表現の仕方を工夫させる。個別指導を行う。 <p>○グループ内で発表させ、代表による今様合わせを実施する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 児童一人一人のうたをグループ内で発表させる。 グループ内で今様合わせの代表を決定させる。その際、うたの技能だけではなく、歌詞の内容、表現上の工夫など多様な観点から決定させる。 歌詞、「ききどころ」を明確にさせ、代表により今様合わせを行う。 	<p>○自分のつくったうたを練習し、それに合った表現の工夫をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> 歌詞なしで歌ったり、教科書の歌詞で歌ったりして、ふしを確認する。 歌詞の内容や個人によって、速度、発音、リズムや旋律の変化、出だしの音高、など、様々な表現の工夫があることを知る。 班内での発表を目指して、個人で練習をし、表現を工夫する。 <p>○グループ内で個々に発表をし、代表を決めてクラス全体で今様合わせをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> 個人の練習結果をグループ内で発表する。 今様合わせに出場する代表を決定する。その際、代表となった理由を明確にし、「ききどころ」伝えることができるようにしておく。 代表のうたを聞き、歌詞の魅力や表現の工夫を感じ取る。 	<p>アー④</p> <ul style="list-style-type: none"> 声の持ち味やことばを生かして、繰り返し表現しようとしている。 <p>【練習の様子を観察】</p> <p>イー④</p> <ul style="list-style-type: none"> 声の持ち味やことばを生かし、自然で無理のない声で歌う工夫をしている。 <p>【工夫の様子を観察、学習プリント3による確認】</p> <p>ウー③</p> <ul style="list-style-type: none"> 声の持ち味やことばを生かし、自然で無理のない声で歌っている。 <p>【技能の観察による確認、演奏による発表】</p>

9) 評価の進め方は？

学習活動における具体的評価規準による評価の、A（十分満足できると判断されるもの）B（おおね満足できると判断されるもの）C（努力を要すると判断されるもの）の判断は児童の次のような具体的状況を考えられています。

【1時間目】

学習活動における具体的評価規準	A（十分満足できると判断されるもの）の具体的状況	B（おおね満足できると判断されるもの）の具体的状況	C（努力を要すると判断されるもの）と判断される児童への働きかけ
○提示されたことばの抑揚やリズムに注意し、声に出して表現する。			
アー① ・ことばの抑揚やリズムに興味を持ち、繰り返し表現しようとしている。 イー① ・ことばの抑揚やリズムを感じ取り、それらを生かした表現の工夫をしている。	・提案された言葉に対して、何度も声に出したり、自分の表現を友達に伝えようとしている。 ・ことばの抑揚やリズムを口や表情、体で顕著に表現している。	・提案されたことばに対して、声にだして表現している。 ・ことばの抑揚やリズムを口や表情、体で表現している。	・教師と一緒に表現したり、より応答しやすい課題提供をしたりする。
○「雪わたり」（宮沢賢治）に提示されているリズムや歌詞をいかして歌にする。			
アー② ・友達と協力し、「雪わたり」のうたづくりに取り組んでいる。 イー② ・「雪わたり」のうたにあることばの抑揚やリズム、曲の構成を感じ取って、うたづくりを工夫している。 ウー① ・歌詞の内容にふさわしい発音、ことばの抑揚やリズムを生かした歌をつくっている。	・うたづくりを工夫する言葉や表現を観察できる。 ・うたづくりの中で、ことばの抑揚やリズムに関する語を豊富に使用している。 ・学習プリントの記載が十分である。 ・学習プリントの記載が十分である。	・友達とうたのやりとりをしている。また、意見交換をしている。 ・うたづくりの中で、ことばの抑揚やリズムに関する語を使用している。 ・学習プリントがおおむね記載されている。 ・学習プリントがおおむね記載されている。	・ヒントになるフレーズをたくさんあたえたり、「キックキックトントン」の基本リズムを脇で歌ってあげたりする。また、友達のフレーズの一部を借用することが可能であることも示す。

【2時間目】

学習活動における具体的評価規準	A (十分満足できると判断されるもの) の具体的状況	B (おおね満足できると判断されるもの) の具体的状況	C (努力を要すると判断されるもの) と判断される児童への働きかけ
○提示された題にそって、七五調、八五調などでことばをつらね、声に出して表現する。			
<p>アー③</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分の発想を生かし、意欲的に音楽を作り出そうとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> 問いかけに対して何度も挙手をするなど、答えることができるという意思表示が明確である。 学習プリントに積極的にことばを書き出している。 	<ul style="list-style-type: none"> 問いかけに対して挙手などをして答えることができるという意志を示している。 学習プリントにことばを書き出している。 	<ul style="list-style-type: none"> 教師の例示を多くしたり、早めにできた児童の作品を紹介したりする。
○越天楽のふしにことばをあてはめながら曲をつくる。			
<p>イー③</p> <ul style="list-style-type: none"> 越天楽のふしの特徴を感じ取って、それに合う曲づくりをしている。 <p>ウー②</p> <ul style="list-style-type: none"> 言葉の抑揚やリズムを生かして、まとまりのある曲をつくることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 越天楽のふしに合うことばを発言したり、学習プリントに書き出したりしていることが顕著に観察できる。 繰り返し歌って練習し、グループ内での表現に統一性が見られる。 	<ul style="list-style-type: none"> 越天楽のふしに合うことばを発言したり、学習プリントに書き出したりしている。 繰り返し歌って表現し、まとまりのある曲にすることができている。 	<ul style="list-style-type: none"> ふしに合うことばを一緒に考えたり、他のグループの作品を紹介したりする。 一緒に歌ったり、出だしの音高やことばのまとまりなどについてアドバイスをする。

【3時間目】

学習活動における具体的評価規準	A (十分満足できると判断されるもの) の具体的状況	B (おおね満足できると判断されるもの) の具体的状況	C (努力を要すると判断されるもの) と判断される児童への働きかけ
○自分のつくったうたを練習し、それに合った表現の工夫をする。			
○グループ内で個々に発表をし、代表を決めてクラス全体で今様合わせをする。			
<p>アー④</p> <ul style="list-style-type: none"> 声の持ち味や言葉を生かし、繰り返し表現しようとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の歌を一人で繰り返し練習し、表現しようとしている。 グループ内で練習の成果を積極的に発表している。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分のうたを一人で練習し、表現しようとしている。 グループ内で練習の成果をすることができている。 	<ul style="list-style-type: none"> 脇で一緒に歌ってあげたり、友達の表現の具体的な工夫を教えたりする。

<p>イー④</p> <ul style="list-style-type: none"> 声の持ち味やことばを生かし、自然で無理のない声で歌う工夫をしている。 	<ul style="list-style-type: none"> 出だしの音高や発音、速度などに気を付け、歌詞の内容や自分の声に合った歌い方をし、表現の工夫をしている。 具体的な工夫に関する学習プリント3への記述が十分である。 	<ul style="list-style-type: none"> 出だしの音高や発音、速度などに気を付けたら、歌詞の内容や自分の声に合った歌い方をしたりして、表現の工夫をしている。 具体的な工夫を学習プリント3に記述してある。 	<ul style="list-style-type: none"> 音楽の諸要素に関する具体的な工夫のポイントを指示したり、一緒に表現を工夫したりする。
<p>ウー③</p> <ul style="list-style-type: none"> 声の持ち味やことばを生かし、自然で無理のない声で歌っている。 	<ul style="list-style-type: none"> 出だしの音高や発音、速度などに気を付け、歌詞の内容や自分の声に合った歌い方をすることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 出だしの音高や発音、速度などに気を付けたら、歌詞の内容や自分の声に合った歌い方をしたりして歌うことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 適切な表現を教師が師範したり、技術的なアドバイスを行ったりする。

おわりに

この授業はもちろん「越天楽今様」を「歌唱教材」としてどのようにとらえ、授業として成立させていくかということについて、筆者なりの理論と実践の融合を試みたものである。しかし、このことと並行して通奏低音のように流れている考えがある。それは、「うたの誕生劇をなぞる新しい授業の提案」である。子どもが本来持っているうたを自然につくり出す力、わらべ歌や民謡の創出・変容に見られるような音楽創造の力は、人間の成長の過程において個の内部に蓄えられた感性を基盤としながら自らが身体化されてきたうたをなぞることによっていっそう研ぎ澄まされ、あらたな音楽文化をダイナミックに形成してきた²⁴。この意味においては、うたがまったく白紙の状態から生まれるということはないわけで、その誕生はむしろ個々の人間が一つの型を吸収し、それをなぞり、自己と一体化させることにより内部からわき出た結果である。「雪わたり」「今様」の世界がまさにこれにあたる。

今回の試みは、こうした過程を音楽授業で成立させるための第一歩と考えている。もとよりわずか3時間でこのことが結実するとは思っていないが、本授業では、子どもの中で、ことばとしての「型」（今回は、主として七五調）から自分だけのことばが生まれ、うたとしての「型」（今回は、越天楽のふし）を吸収する中で、新たな自分のうたが形成されていけば良しとしたい。

最後に、附属長岡小学校の諸先生、そして何よりも6年1組の子どもたちに心より感謝したい。

注

- 1 「標準中学生の音楽1」教育出版株式会社 昭和36年 p. 28
- 2 「教藝の中学音楽3」教育芸術社 昭和28年 p. 5
- 3 平野健次監修 LPレコードアルバム「日本音楽の魅力を探る その5 越天楽とその歌謡」東芝EMI株式会社制作 1980年
- 4 「日本キリスト教団賛美歌第二編」収録133番
- 5 平成13年度卒業、現柿崎町立柿崎小学校教諭
- 6 岩崎洋一『小学生の発声指導を見直す』音楽之友社 平成9年 pp. 16-22
- 7 秦恒平『梁塵秘抄 信仰と愛欲の歌謡』NHKブックス311 昭和61年第11刷 p. 164
- 8 平野健次観衆 LPレコードアルバムの解説書「日本音楽の魅力を探る その5 越天楽とその歌謡」東

芝EMI株式会社制作 1980年

- 9 蒲生美津子「越天楽をめぐって 越天楽の歴史」『季刊 邦楽十二号』p. 29
- 10 植木朝子「今様・雑芸歌謡—平安時代の振興歌謡—」『歌謡文学を学ぶ人のために』小野恭靖編 世界思想社 p. 88
- 11 日本古典文学全集25 小学館 p. 181
- 12 馬場光子「今様のこころとことば—『梁塵秘抄』の世界」昭和62年 三弥井書店 p. 8
- 13 「日本古典文学全集25 小学館 昭和51」p. 180
- 14 秦恒平『梁塵秘抄 信仰と愛欲の歌謡』NHKブックス 日本放送出版協会 昭和61年 p. 8
- 15 NHK BS 放送における、ドーモ君のラップ。
- 16 宮沢賢治『風の又三郎』より
- 17 歌舞伎「白浪五人男」より
- 18 『国語5上』教育出版 平成12年1月
- 19 『国語5下』教育出版 平成12年1月
- 20 詳細は拙稿をご覧ください。伊野義博「新潟県のしみわたり歌」『新潟大学教育人間科学部紀要 第3巻 第1号 人文・社会科学編』平成12年 pp. 93-106
- 21 『日本わらべうた全集2下 岩手のわらべ歌』平成5年第二刷 柳原書店
- 22 この授業構成案はあくまでも私個人の例としてお考え下さい。また、一般的には、このような形のもの
は学習指導案となっていますが、本稿では研究と学習指導を結ぶ一連の作業の中で、授業をどのように構
成していくかという実践的な方法論を示していますので、このような名前にさせていただきました。
- 23 国立教育政策研究所のホームページをご覧ください。
- 24 拙稿「音楽が生み出される場と子どものかかわり」『学校音楽教育実践シリーズ1 日本音楽を学校で
教えるということ』日本学校音楽教育実践学会編 音楽之友社 2001年 pp. 51-52

◎ 資料 学習プリント1

6年1組 番 氏名 _____

「雪わたり」(宮沢賢治)のうたをつくってうたおう

雪がすっかりこおって大理石よりもかたくなり、空も冷たいなめらかな青い石の板でできているらしいのです。

「かた雪かんこ、しみ雪しんこ。」

「かた雪かんこ、しみ雪しんこ。きつねの子あ、よめいほしい、ほしい。」

(四郎、かん子)

「しみ雪しんしん、かた雪かんかん。」(白ぎつね)

「きつねこんこん白ぎつね、およめほしけりゃ、とってやろよ。」(四郎)

「四郎はしんこ、かん子はかんこ、おらはおよめはいらぬよ。」(白ぎつね)

「きつねこんこん、きつねの子、およめがいらぬきゃもちやろか。」(四郎)

「四郎はしんこ、かん子はかんこ、きびのだんごをおれやろか。」(白ぎつね)

かん子もあまりおもしろいので、四郎の後ろにかくれたまま、そっと歌いました。

「きつねこんこんきつねの子、きつねのだんごはうさのくそ。」(かん子)

きつねは、おかしそくに口を曲げて、

キックキックトントンキックキックトントン

キックキックキックキックトントン

と足ぶみを始めて、しっぽと頭をふってしばらく考えていましたが、やっと思いついたらしく、両手をふって調子をとりながら歌い始めました。

このリズムをいつも心の中において、四郎とかん子と白ぎつねの「うた」をつくってうたおう。

【白ぎつねのうたー1】

しみ雪しんこ、かた雪かんこ、野原のまんじゅうはポッポッポ。
よってひょろひょろ太右衛門（たえもん）が、去年、三十八、食べた。

【白ぎつねのうたー2】

しみ雪しんこ、かた雪かんこ、野原のおそばはホッホッホ。
よってひょろひょろ清作が、去年、十三ばい食べた。」

【四郎のうた】

きつねこんこんきつねの子、去年きつねのこん兵衛が、
左の足をわなに入れ、こんこんばたばたこんこんこん。

【かん子のうた】

きつねこんこんきつねの子、去年きつねのこん助が、
焼いた魚を取るとして、おしりに火がつききゃんきゃんきゃん。

自分のつくった「うた」を、キックキックトントンのリズムにあてはめてみましょう。（あとで先生が見ます。）

例

キック | キック | トン | トン |

か た き し こ
ゆ ん

キック | キック | トン | トン | キック | キック | トン | トン |

キック | キック | キック | キック | トン | トン | トン |

「うた」ができれば、みんなで練習して「げんとう会」に参加したつもりでうたおう。

◎ 資料 学習プリント2

6年1組 番 氏名

私の越天楽今様^{えてんらくいまよう}

～自分だけのうたをつくって歌おう～

昔の人は次のような「うた」をつくって、もともとあった「ふし」にのせてうたいました。いわば、むかしの「かえ歌」ですね。

春のやよいの あけぼのに よもの山辺を 見わたせば

花ざかりかも 白雲^{しらくも}の かからぬみねこそ なかりけれ

こんなおかしなものもあるよ。

頭に遊ぶは^{こうべ} 頭風^{かしらぢらみ} 頂の窪をぞ^{うなじ くぼ} 極めて食ふ^き

櫛の歯より^{くし} 天下る^{あまくだ} 麻笥の蓋にて^{まごけ ふた} 命終はる^{めい}

頭の中で遊んでいるのは、しらみだ。いつも首すじのところを決めて食う。でもクシでとかされて、クシの歯の間から落ちていっちゃう。最後は、おけのふたの上でつぶされておだぶつだ。

なかなかおもしろいでしょう？ ヒントを参考に、自分たちもつくってみましょう。

ヒント

- このごろ巷^{ちまた}で はやるもの あらしスマップ モー娘^{むすめ}
 - このごろ学校で はやるもの ～
 - このごろクラスで はやるもの ～
 - このごろ〇〇〇で はやるもの ～
 - このごろわたしが おもうこと ～
 - わたしがいちばん すきなもの ～
 - おいしいカレーの つくりかた ～
 - 夏になったら したいこと ～
 - 〇〇〇に遊ぶは 〇〇〇〇〇 ～
- あと、いろいろと考えてみよう。

まずは、ヒントのうたの続きをみんなで考えてみよう。

① このごろ巷^{ちまた}で はやるもの あらしスマップ モー娘^{むすめ}

次に自分の思っていることを自由にうたにしてみよう。

② _____

もう一つ、自分で自由につくってみよう。

③ _____

できたら、練習をして越天楽^{えてんらく}の「ふし」にのせてうたおう。

◎ 資料 学習プリント3

6年1組 番 氏名

私の越天楽今様

～今様合わせをしよう～

みんな自分だけのすてきな「うた」ができあがったね。今度はその「うた」を友だちに伝えよう。教科書に出ていた「今様合わせ」だ。さて、どんなふう工夫するとうまくいくかな？下に書かれているのは、そのためのヒントです。

自分のつくった「うた」や自分の「こえ」が、

- とってもやさしい
 - ちょっとおどけた
 - 少しひにくれた
 - なんだかぼかぼかした
 - ふしぎなふんいきをもった
 - やわらかい（あるいは、かたい）
 - あたたかい（あるいは、つめたい）
 - おぼけのような
 - お花畑にいるような
 - ととてもまじめな
- （あとは自分で考えてみて～）

感じだから

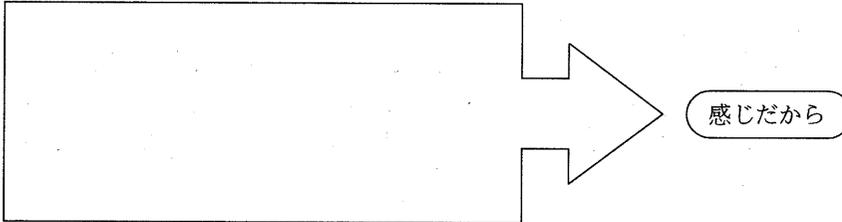
「うた」の

- 速さ を 速くして
(ゆっくりにして,
ちょうどいいくらいにして)
 - 出だし を 低くして (高くして)
 - 言葉 を はっきりと (やわらかく)
(伸ばしたり, つめたり)
 - リズム を 少しかえて
 - ふし を 少しかえて
 - 声の音色 を しぶくして (明るくして,
軽くして)
 - 音 を 短く切って (なめらかに)
- （あとは自分で考えてみて～）

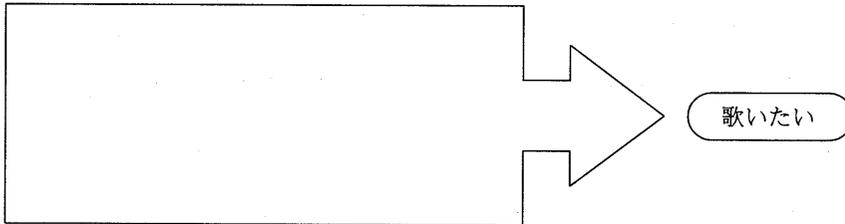
歌いたい

左のページを参考にして、自分の「うた」を工夫しよう。

自分のつくった「うた」や自分の「こえ」が、



「うた」の



* 「こんな声を出したい、こんなふうにして歌いたい、でもうまく声が出ない、どうやって歌っていいかわからない。」という人は先生に声をかけて下さい。

グループの代表を決めよう。

歌がじゃうずだということだけで選ぶのではなく、次のことも考えて友だちのうたを聞きましょう。

- 歌詞がとてもすてき（美しい、おもしろい、あったかい気持ちになる）。
- 歌う表情がとても豊か。（歌詞の内容と合っている。表現力がある。）
- 声に味がある。 ・ 声の音色を変えている。
- ふしまわしを工夫している。（他のひととちょっと違うけどおもしろい）。（あとは自分で考えてみて～）

あなたのグループの代表のうたは、どんなところがステキですか。